

---

# 無限亡霊の未練

凜野 冥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無限亡霊の未練

### 【Nコード】

N8726Z

### 【作者名】

凜野 冥

### 【あらすじ】

楽しい学園生活を送る郷栖秋哉の所属するクラスで、異変が起こり始める。彼らに接触を始める謎の少女と、秋哉が目撃するようになる謎の少女。彼女について、クラスメイト達は遠い記憶をうっすらと想起する。そのクラスでは、過去に突然消えてしまった一人の女子生徒がいた。やがてクラスメイト達が次々と消息を断ち、秋哉は全ての物事の原因となったある出来事を思い出す……。

## 少女は物静かで、

さてそれでは幕開けです。

心行くままお楽しみ下さい。

三。二。一。

.....。

青春時代特有の若さと甘酸っぱさと、

その影にある曖昧さと不気味さがうずまく物語、

無限亡霊の未練、開始。

1

その日、僕が乗る電車の車両には他に人がいなかった。

それほど遅い時間でないにも関わらず貸し切り状態の車両に僕は違和感や不信感を抱いたが、特に不都合なことがある訳でもないので、適当な椅子に腰かけて電車が発車するのを待つことにした。

それに僕は電車の中が騒がしいのを好まない人間であるので、この状況において僕は、気味悪さよりもある種の心地良さをさえ感じていた。

やがて全ての扉が同時に閉まり、電車は動き始めた。とうとう僕がいる車両に人が乗って来ることはなかった。

僕が座っている席は車両の両端に沿って続いている長いもので、正面にある窓の外に目を遣ると、遠くを鮮やかな光が左から右へと流れていく。電車の走行音のみが聞こえる奇妙な静けさのせいもある。僕は何か物悲しい気分させられた。

2

感傷に浸るような真似はどうしても後ろ向きな行為に思えてしま  
うから、僕はそれを好まない。僕は今日学校であった楽しい出来事  
を回想し、曖昧なままに僕を蝕もうとする負の感情を忘れようと試  
みた。

僕は学校が好きで、級友達が好きで、好きな学校で好きな級友達  
と共に過ごす時間が好きだ。この生活が永遠に続いてくれたら良い  
と常々考えている。

しかし、まだ先の話ではあるが、いずれ僕らは進級し、その時に  
クラスは別々になってしまう。もう会えなくなるのもあるまいし、  
それをあまり悲しいことだと捉えない者達も相当数いるだろう。だ  
けど、今のクラスでの生活は、永遠に失われてしまうのだ。僕はそ  
れを思うと、いつも胸の奥に嫌な痛みがはしるのを感じた。それは  
例えるなら、自分が死に至る時のことを考えているようで……。

……いけない、また思考が暗い方向に回ってしまった。

その時、僕は、通路を挟んだ正面の席に、僕と向かい合うように  
して一人の少女が座っていることに気がついた。

他に人が誰もいないこともあって少女の存在はかなり不自然で、  
周囲の景色に溶け込めていないかのような印象さえ与えた。その一  
方で、彼女の存在感というのは今すぐにも消え失せてしまいそう  
な儂い希薄なものであった。

少女と言っても年齢は僕と同じくらいかもしれない。おそらく別  
の車両からここに来て来たのだろうけれど、物思いにふけてい  
た僕はそのことに今まで気付かなかつたらしい。しかしそれも当然  
と言える程に、少女は物静かで、いてもいなくても変わらないよう  
な気さえした。

黒くて長い髪が腰の上まで伸びていて、とても綺麗だ。少し俯い  
ているため顔は見ることは難しい。体つきは細身で、その手や足を  
見るに、貧弱とさえ形容できると思えた。

ただ僕はその少女について最も不審に思った点は、彼女の服装に  
ついてだった。今は夏真っ盛りで、夏休みが近い内に始まるうとし

ている時だ。しかし少女の服装はどう見ても冬にするものだった。白いダッフルコートを着て、さらに首には赤いマフラーまでまいているというのだから、驚かされるのも無理はない。電車の中はそれなりに冷房が効いているけれど、それでもその完全な防寒対策が施された服装は過剰といえるだろう。

少女は終始俯いていて、僕を見ることはなかった。時折その表情が僕には見えただけで、それは何やら悲しみに沈んでいるかのような陰鬱なものであった。

あまり不躰にじろじろと見続けるのも気が引けて、その後僕はまた少女の背後の窓の外に視線を戻した。遠くの色とりどりの灯りを眺めていると、電車は次の駅に到着した。そこは僕の下りる駅だった。

扉が開く。僕は立ち上がって、電車から出た。

むせ返るような熱気に、僕は不快感を覚える。

「秋哉？」

不意に、凜とした女の子の声が聞こえた。

僕は声がした背後に振り返る。

そこには先程まで僕の正面に座って俯いていた少女が立っていて、僕を見つめていた。

「え？」

その少女が可愛らしい顔立ちをしているということが分かった直後、扉が閉まり、僕と少女は隔絶された。

電車は走り出した。僕は駅のプラットフォームに一人取り残される。

僕はしばらくその場から動けずにいた。頼りない蛍光灯の灯りのみが周囲を照らす薄暗い景色の中、僕はひたすら啞然としていた。

僕はあの少女のことを知っているような気がしていた。

少女は物静かで、（後書き）

「無限亡霊の未練」はこれまで本格ミステリを敬愛し執筆してきた僕が、自らの新境地という位置付けで創作することを決めた物語です。

ミステリ、ホラー、オカルトなどの要素を上手く融合し、これまでになかった新感覚の作品を完成させられるよう、頑張っていきたいです。

更新は遅めになることが予想されますが、お時間のある時に覗いてもらえると幸いです。

おはよう、の由来を知っているかい？

2

僕が通う御守<sup>おまもり</sup>中学校は田舎にぽつんと建っている進学校だ。

進学校と呼ばれるだけあって有名高校への進学率が高く、入試が必要で、入学にあたってある程度の実力が求められる。しかし学校そのものは他の進学校と比べ施設も少なく、規模も小さく、場所も辺鄙で、生徒数は驚くくらいに少ない。だから御守中学校は、物好きな秀才が集まる、というレッテルを貼られている。もう少し口の悪い評価では、変人達の学校というのもあるくらいだ。

ところで僕もそんな物好きな秀才あるいは変人なのかと言うと、それには首を傾げざるを得ない。そのような非凡なる者達というのは、自分の特殊性に自覚が足りない場合が多いというような話はよく聞くが、特に僕がそのような場合の実例という訳でもないと思う。自覚云々の話だけではなく、僕をそのように噂するような声も、今のところ聞いたことはそう多くない。

しかし僕は変人と呼ぶには役不足も極まりないが、他の生徒達はというと、確かに彼らは変人足り得て、秀才足り得ている。そして僕はそのことに不都合も嫌悪も苦手意識も感じていない。それは即ち个性的であるということ、素敵であり愉快であり面白く楽しく興味深く素晴らしい。だからこそ僕はこの学校生活をなかなか有意義に過ごしているという自負があるし、目一杯楽しんでいるのだと思う。

そんな僕が現在所属しているクラスは二年三組。この中学は各学年三クラスまでしかなくて、その各々の生徒数は大体十五人前後である。少人数クラスであることが、授業の質の向上を助けているということらしい。

僕は今日の朝も、二年三組の教室にいた。

「おはよう、の由来を知っているかい？」

琴葉くんはルービックキューブをいじりながら、朝の挨拶をした僕に対して、低くて平淡な声を、実につまらなそうな態度で発した。「いや、知らない」

僕が正直に答えると、琴葉くんはルービックキューブの六面の色を揃えようと作業する手を止めないままに、話し始めた。

「お早くから登校お疲れ様です。お早くから会えて嬉しいです。とあったようなことを、その日相手に初めて会った時、挨拶として述べるのは別に不自然じゃないよね。おはよう、の言葉は、お早く何ですね、という挨拶からできたのだよ」

琴葉くんはそこでルービックキューブを机の上に置いた。丁度六面全ての色を揃えることができたらしい。いや、そのような抜群に良いタイミングを狙い、台詞の量や話す速度を調節したのかもしれない。なかった。

琴葉くんはやつと僕の方に向き直り、眠たそうに薄く開いたただけの目で、僕を見つめた。彼は髪が長くて、常に倦怠感をむき出しにしているような表情をしている。

「そう考えてみると、普段から当然のことのように使っている言葉の数々が、一体どのようなことを実際は指していて、一体どのようなことが由来となって生じたのか、ということに僕らは把握していないことが非常に多い。これは僕からすれば、気持ちが悪い」

「……まあ、確かにそうだな」

気軽に挨拶しただけなのに、それに対してここまで深く掘り下げた話をされるといふのは意表を突かれたところの衝撃ではなかった。僕は反応に困った。そんな僕をやはり退屈そうに琴葉くんは見ているが、やがて視線を外し、首を横に振った。

「それだけだよ。ただの雑談だ。思ったことを言葉にしたらだけ。何か深い意図があるのではないよ。おはよう、郷栖くん」

琴葉くんは再びルービックキューブを手にとっていじり始めたので、会話はそれきり終了ということだろうと僕は解釈して、その場

を離れた。

琴葉くんはフルネームを無白<sup>むしろ</sup>琴葉といい、教室に入ってすぐ左側が席であるため、毎朝最初に顔を合わすことになる。その度に彼は一席ぶつてくれるのだ。雑学といつては聞こえが悪いが、そういった種類の知識量は学年随一だと言われている秀才である。僕とは普段から朝に会話するだけで、内向的な彼はその他の機会でも僕や他の級友達と口をきくことは極めて少ない。そのくせ朝は結構饒舌を披露するのだから、まったく不思議な人だ。

僕が登校してくる時間は比較的早い方であるので、教室には僕と琴葉くん以外に七人の生徒しかいなかった。琴葉くんの席を通過した僕は、次に席について読書に勤しんでいる加奈<sup>かな</sup>さんにも軽い挨拶をする。

「おう、郷栖か。良いね、今日も格好良いぞ。ただ後ろの寝癖がどうにかならなかったものか、と私は疑問を呈さずにはいられないな。よもや気付いていないということもあるまい。その歳になって自らの身なりに気をつけないような野暮な男など、いるはずがないからな」

この人も饒舌な向きであるから、時々捕まると話が長くなる。加奈さんはこのクラスの学級委員を務めていて、かなりの世話好きなのだ。勿論勉強もできるし、特筆すべきは常人離れた運動能力である。新体力テストという、運動能力を測るテストが毎年行われていて、去年彼女は全ての種目で満点だったことで表彰を受けていた。この学校は運動にはあまり力を入れていないので、彼女はこの学校に進学したことが悔やまれるとあちこちで噂されているのだ。しかし彼女の変人具合も少々並外れたところがあり、凡百の学校には不適合である気もするから、僕としては彼女の学校選択は正しいものであったと思っている。

「ごめん、気がつかなかった。今朝は寝坊しちゃってさ、電車に間に合うように急いでいたから、鏡を見る間もなかったんだ」

「成程な。しかし感心できた話じゃないな……。ん、そうだ、面白

いことを思いついたぞ」

加奈さんは唇の端を、悪戯っぽくにいと吊り上げた。そして本を閉じて机の上に置くと、立ち上がった。

「一緒に来てくれよ。おっと、鞆は置いてこい」

「え、どこに行くんだよ」

僕は当然狼狽したが、加奈さんが「いいから早くしろ」と促すので、訳が分からないままに仕方なく自分の席に向かった。

このクラスは生徒が全部で十四人で、席は横四列縦三列の十二席が前方に固まっていて、その後ろに席が二つ置かれているかたちとなっている。僕の席はその後ろの二つの内の黒板に向かって左側だ。

「何する気だよ、加奈」

窓際に固まっていた三人の男子の内の一人、真伏くんまふせが大きめの声で加奈さんに尋ねた。彼は加奈さんの幼馴染である。

「郷栖の髪いじってやろうと思つてな。真伏、ワックス貸してくれ」

「おう、いいぜ」

真伏くんは自分の鞆からヘアワックスのスプレーを取り出すと、加奈さんに投げた。加奈さんはそれをキャッチして、僕に微笑みかける。僕は彼女の企てを知って困惑したが、今更断ることはできないと思つて、素直に従うことにした。

自分の机の上に鞆を置くと、隣の席の絵里ちゃんえりがくすくすと可愛らしい笑い声をあげた。

「大変だね。加奈はこだわるよお」

「まあ仕方ないかな」

「大丈夫。私も行くから」

絵里ちゃんは楽しそうに笑いながら、席を立った。何が大丈夫なのかはまったく分からなかったし、状況は悪化した気しかなかった。

僕は加奈さんに連れられて教室の外に出た。絵里ちゃんも僕らについてくる。背後から真伏くんの「楽しみに待ってるぜ」という若干以上に冷やかしの混じった言葉が聞こえた。

ミステリ研の連中が登校してくる前で良かった、と僕は思った。奴らがいたら、もっと面倒なことになったことだろう。

「以前から私は思ってたんだよ、郷栖は髪セットしたらもっと格好良くなるって」

加奈さんは快活に話す。彼女は身長が高くて、僕と同じくらいである。さらに彼女は大股歩きなので、ペースを合わせるにはこちらは早足で歩かなければならない。

「うんうん、私も思ってたあ。どうして郷栖くんって、あまり御洒落に執着ないのかなあ、って」

絵里ちゃんは僕の隣を歩いている。彼女は加奈さんとは対照的に背が低く、かなりの童顔である。あどけない顔が、男女問わず愛される一因となっている。しかし絵里ちゃんは残念ながら特定の男子とは恋愛関係を作らないようにしているらしく、よって彼女のファンというのには表にあまり出てこない。

「元が良いと御洒落とかしなくても格好つくからな。そういうことだろ、郷栖」

「違うよ。そんなナルシストじゃない」

「謙遜する必要はない。お前に想いを寄せる女子は結構いるぞ。お前の中性的な顔立ちは、相当に乙女を惑わせるものだ」

僕はそれに対しても首を横に振って否定しようとしたが、その時、視界の端に一人の少女が映った。

時間が一瞬停止したかのような錯覚を僕は受けた。目を見開いて口を半開きにして、今の僕の表情はさぞかし阿呆みただろう。

視線の先にいる少女と今、僕は目が合っている状態だ。そして僕は少女から目を離すことができない。

少女は、昨夜電車の中で会った少女だった。

昨日と同じ、白いダブルコートに赤いマフラー。長めの綺麗な黒髪に、色白の肌、今にも消え失せてしまいそうな希薄な存在感。僕が呆気にとられていると、少女は僕から目を逸らし、その場から離れた。少女が廊下から消える。階段に行ったのだ。

僕は走り出してた。今追いかけないと、あの少女とは二度と会えなくなってしまうような気がしていたから。

やはり僕は少女に見覚えがある。彼女からはどこか懐かしい気配がする。しかし、彼女が誰だか思い出せない。今取り逃せば、この曖昧な懐かしさの正体は永久に分からないままになってしまふに違いない。

僕は階段に辿り着いたが、上にも下にも、少女の姿は見当たらなかった。

少女は消えてしまった。

「郷栖、どうしたんだよ。突然走り出されたら驚いてしまふだろ」

「郷栖くんも奇行にはしることあるんだねえ」

加奈さんと絵里ちゃんの声が、えらく虚ろに聞こえてきた。

3

真織まおりはやはり僕の髪型に過剰な反応をした。

「これは珍しいわ！ 秋哉も随分と色気づいたのね！ なかなか様になってるじゃない。ごめんなさい、私の語学力ではこの衝撃を言葉で表現することはちょっとできないわ。どうしたって控え目な表現にならざるを得ないもの。それ程までに私は驚愕しているし、それに嬉しいわ。残念美人っていうのかしら、秋哉って少なからず勿体ない雰囲気があったもの」

「そこまで言うほど変つてないだろ。前髪に分け目つくつて、ちょっとつぺんが持ち上がったただけじゃないか」

「失礼なこと言うね、郷栖。私と絵美が三十分かけてあげたのに。郷栖の頭は後ろが少し平たいからバックとトップにボリューム持たせて少し立てて、耳に被さっているだけだった髪をしっかりと整えて、前髪は変に浮かないようにして左に分けて、それに合わせて全体を整えていき、適当な箇所をはねさせる。かなり頑張つてセットしたのだぞ、私達は。郷栖はずっと痛い痛いと言句を垂れていたけれど

な

「そうだよお。あとで写真とらせてねえ」

僕は今席に座っているところを加奈さん、絵美ちゃん、真織に囲まれている状態だ。そんな僕を、遠くから真伏くん達がニヤニヤしながら眺めている。他のクラスメイトも時々ちらりとこちらを見てくる。中でも香奈枝<sup>かなえ</sup>さんが軽蔑をこめたような眼差しを時折向けてくるのがつらかった。

「それに私が喜んでいるのは、君がそのような外見を飾る行為に開放的あるいは興味があるということを知れたからよ。人間観察を趣味とする私にとって、友人の新たな一面を発見するということは、枯渴しきった私の魂に潤いを与えてくれるわ。例えるならば、私は砂漠をさまよっていて、死ぬ寸前で命を繋ぐ水分を得ることができた、というような気分なの。ああ、最高の快感よ、私の生き甲斐そのものだわ！」

真織は真性の変態であるから、このような言動は皆にとって頻繁に耳にすることである。だから平気なのだが、初めの頃は皆、啞然としたり困惑したりしたものだ。

伊藤真織は僕の級友であると同時に、僕と部活を共にする者だ。ミステリ研究部、というのがその部活だ。彼女とは部活で初めて会ったのだが、人数の少ない部活なので関わる機会も多く、すぐに仲良くなり、学年が二年生に上がると偶然同じクラスとなった、といった次第である。真織は少し茶色がかった髪をショートヘアにしている、目が大きくて口が小さい。常に口元に微笑を刻んでいるのが特徴的だ。

「あれ、随分と秋哉がモテているじゃないか」

そう言ってやって来たのは、僕の親友である川蝉<sup>かわせみ</sup>可也<sup>みなり</sup>だった。

「羨ましい限りだよ。僕のような地味な人間は一生をただただ孤独を味わうことだけに費やすばかりだと決まっているからね、是非あやからせていただきたいものだ。ん、髪型を変えたのか」

「加奈さん達がいじったんだ」

「なんと。秋哉、君は何故かそれが不本意極まりないことだった、と言いたそうな表情をしているが、僕からすればそれは非常に男冥利に尽きる話だ。他でもない加奈さんに髪を整えてもらえるだなんて、自分の残りの人生に存在する幸福の全てを犠牲にしても誰もが望むだろう」

「じゃあ川蝉のもしてやるぞ。そこまで御世辞を並べ立てられれば、人から褒められることを生きる意義の全てだと考えている私としては、動かざるを得ないからな」

「いや遠慮しておこう」

「結局僕をからかいたいただけなんじゃないか」

可也は日常会話の八割をその場の思いつきだけで述べる男だ。よって、いちいちそのような虚言に突っかかるのは徒勞である。半年近く同じ教室で過ごしてきた僕らからすれば、それは身に染みて理解できていることであり、そもそも僕は彼とは去年からミステリ研で付き合っている。

可也が先程自ら口にした地味な人間という自己評価も全く信用できない文言であり、彼は別段地味でもなく、むしろ女子からの人気ならば右に出る者があまり見当たらない。背が高くて理知的な佇まいは、女性を魅了するのにかなり役立つているのだろう。

「ああ可也、君が来るのを私は先程から待ち焦がれていたのよ。ちよっと私の席に来てくれるかしら、見せたいものがあるの。やっと入手したのよ」

「それはひよつとして以前話していたあれかい？ 原典の方が手に入ったのか？ それは驚きだ。入手方法もお教え願えるかな、今後の参考にしたい」

真織は可也を連れて僕の席から離れて行った。あの二人の話の内容はマニアックが極まっているので、僕は聞こうという気すらおきない。

「ところで郷栖くん、髪を染めてみようとかは思わないの？」

絵里ちゃんが僕の顔を覗きこんできて、僕は一瞬驚いて身を引い

てしまった。

「染める？ そんなことはしないよ。積極的に校則を破るような真似も馬鹿馬鹿しいしさ」

「当たり前だ、学校の風紀を乱すような輩がクラスにいたのでは学級委員である私の面目が立たない。絵里が言っているのは仮の話だろ。うーん、郷栖にはスタンダード過ぎるが、やはり茶色が似合うかもしれないな」

「染めるならそろそろ夏休みなんだし、その間だけすればいいんじゃないかな、って私は思うんだけどね。だけど郷栖くんは、この際黄色とかにしてみちゃってもいいんじゃないかなあ。派手な格好した郷栖くんも見てみたいし。ああ、郷栖くんは何色が好きなお？」

「赤い」

「え？」

「赤い色が好き」

その言葉は何故だか反射的とすら言えるほどに自然にすぐに口から出た。しかし僕は、果たして赤が好きだろうか。

この時に僕は妙な引っかかりのようなものを感じていた。

おはよう、の由来を知っているかい？（後書き）

登場人物が序盤でこんなにたくさん出てきたんじゃ混乱しちゃおうよー、という批判に對しましては、非常に情けないですが、学校という性質上仕方がなかったと言うほかありません； 登場人物紹介表とか作ってみた方がいいのかもしれないなー、とか思いながら自分も混乱して書いてます；

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8726z/>

---

無限亡霊の未練

2012年1月5日00時46分発行